

## 三重大大学教育学部附属小学校での 2 つの実験授業における指導効果の比較検討

佐 藤 年 明

本稿は、拙稿「小学校性教育における『生命誕生過程』の授業実践の自己分析」（2008 年）の続編である。前稿で自己分析した授業実践「おなかの中の赤ちゃんの成長」（2007 年 3 月）に続き、同じ三重大大学教育学部附属小学校において、2007 年 12 月 11 日に同タイトルの授業（2 時間、4 年 C 組において）を実施した。2007 年度実践は 2006 年度実践と基本的に同じ指導計画の下に実施したが、2006 年実践の終盤において一方的情報伝達の時間が続いたことを反省し、児童の活動を活発化するための工夫を加えた。その結果 2007 年度実践の後半は 2006 年度実践とは大きく変貌した。このことについて 2 実践の比較分析を行なっている。

なお本稿は、平成 19 年度～21 年度科学研究費補助金（基礎研究（B））「共生社会における性教育の現代的意義 — スウェーデンの先進的事例に学ぶ —」（課題番号 19402048）の一環としての、日本における基礎研究の一部をなしている。

キーワード：「性教育」「生命誕生」「能動的学習参加」「班活動」

### 1. はじめに — 「おなかの中の赤ちゃんの成長」再実践までの経緯 —

本稿は、拙稿「小学校性教育における『生命誕生過程』の授業実践の自己分析<sup>\*1</sup>」（2008 年、以下「前稿」と略記する）の続編である。前稿は 2007 年 3 月 2 日に三重大大学教育学部附属小学校 4 年 B 組において筆者が実施した授業「おなかの中の赤ちゃんの成長」（2 時間、以下「2006 年度実践」と略記する）の自己分析であった。前稿脱稿から 1 ヶ月あまり経った 2007 年 12 月 11 日に、前回同様教育学部教員の附属学校における授業の試みの一環として、附属小学校 4 年 C 組で同タイトルの授業（2 時間、以下「2007 年度実践」と略記する）を行なった。2006 年度実践の際に 4 年 B 組担任の S 教諭とともに事前の相談・調整などで大変お世話になった Y 教諭が、2007 年度の 4 学年を担任され、筆者に再び授業を行なうことを要請されたため、前実践から 9 ヶ月あまり後に、1 年下の子どもたちに対して再び授業を行なえることになった。筆者にとっては前実践の不十分点をふまえてのリベンジの機会ともなった。

前稿の末尾で筆者は以下のように述べている。  
「受精から出生までの 280 日（あるいは 266 日）という学習対象の『中身』として何を取り上げ、取り上げた個々の『中身』をどのように配置し、関連づけるのか、さらには出生以降の人間の成長の学習にどうつなげていくのか。これらのことについて、今回の実践とは違う内容・

学習過程のパターンも含めて、いろいろな授業プランを仮説的に構成してみる必要があると考える。<sup>\*2</sup>」

この時点ではわずか 9 ヶ月後に再チャレンジの機会がくるとは想定していなかったので、かなり長い展望で今後の研究課題を措定している。

しかし前稿の中心部分で述べているように、2006 年度実践では児童の関心が高まり発言も活発になった部分があった一方、児童は熱心に聞いてくれてはいたが授業者が約 22 分間にわたって話し続けるという一方的伝達の場面もあった。それは臍帯と胎盤の役割を説明する部分であった。授業者は大変重要な内容と考えて取り上げた内容ではあったが、説明が長すぎたことは否めず、学習者をこれほど長く受動的状態においてはならないということが授業者の痛恨の反省事項であった。

従ってもし再実践を行なうならば、第 2 時の後半部分で学習者の能動的活動をどう組織するかということを改善点の中心に置きたいと考えた。

授業準備のための打ち合わせは、2007 年 10 月初旬から始まり、12 月 11 日という授業日程が確定したのは 11 月末頃だった。4 年 C 組の Y 教諭の授業は、それ以前にも数時間参観させていただいていたが、授業を行なうに当たり改めて参観を行なった。算数の授業の中で班活動が取り入れられていることを知り、「これを自分もやってみよう」と思いついた。班活動を取り入れることで、じっと聞いているだけの子どもを減らし、学級全体の学習を活性化できることを期待したのである。

## 2. 授業全体の構成

2007 年度実践の構成は、以下の通りである。

(＊印は、各節の到達目標を示している。)

0-1. 自己紹介

＊教育学部の教員であることを紹介する。

0-2. 家族紹介

＊学習の導入として、授業者の子どもたちのことを紹介する。

1. 受精から誕生に至る胎児の驚異的成長

1-1. 出生直後の胎児

＊出生直後の胎児の身長が約 50 cm であることを確認する。

1-2. 受精から出生までの身長の驚異的伸び

＊受精から出生までに、赤ちゃんの身長が約 2000 倍に成長することを実感的に把握する。

2. 母胎内での胎児の形状変化

＊ヒトの胎児の成長過程と、他の動物のそれとの共通点と違いを知り、そこからどんなことが言えるかを考える。

3. 母胎内での胎児の生活の不思議

3-1. 胎児の生活を想像する

＊胎児の母体内での生活と今の自分たちの生活の違いを考え、また疑問点を発見する。

3-2. へその緒（臍帯）の役割

＊胎児が臍帯を通じて母胎から栄養・酸素を受けとり、また老廃物を排出していることを知る。

3-3. 胎児の排泄行動等

＊臍帯を通じて栄養を摂取し、老廃物を排出できるにもかかわらず、胎児が排尿行動をしたり羊水を飲んだりすること、それは出生後の消化・排泄等の行動に向けての訓練ではないかとも考えられていることを知る。

3-4. 胎児と母親の血液は混じり合わない

＊胎児と母親の血液が混じり合うことなしに栄養や老廃物の交換が行われていることを知る。(但し、その機能を持つ臓器としての胎盤の説明は省略する。)

3-5. 母胎内の胎児の映像を見る

＊動画を見ることで、母体内で胎児が生きていることを実感する。

4. Q&A・感想文の作成

上記は 2006 年度実践とほぼ同じものであるが、3-4 の下線部のみを変更した。胎盤についての説明を断念することにより、その前の「3-1. 胎児の生活を想像する」の中で前述の班活動の時間を確保するためである。

なお授業に進行については、逐語的な授業シナリオを準備した。シナリオ通りに授業を進行しようと考えたわけではないが、逐語レベルまでプランを立てることで、構想と実際の進行の違いを分析しやすくなると考えた。

この授業の全記録は、膨大な量となるために本稿内に収録できない。そこで 2006 年度実践同様、web 上<sup>3)</sup>に収録したので、そちらを参照されたい。

なお、班討論を導入したことが 2006 年度実践から 2007 年度実践への（計画段階では唯一の）変更点であり、それ以外の部分ではほぼ同じ授業シナリオに基づいて授業を進行した。「指導効果の比較検討」のためには、共通の指導案による指導によって 2 つのクラスの児童の学習活動にどのような違いが生じたのかについての精緻な検討が必要である。しかし紙数の制限もあり、その作業を全面的に行なうことはできない。本稿では「3-1. 胎児の生活を想像する」に限定して授業の事実を紹介し、検討を行なうこととしたい。

ちなみに、結果としてであるが、「3-1. 胎児の生活を想像する」で班討論後の発言数が予想を大きく超えたため、その後の授業計画は大きく変更せざるを得なかった。具体的には、「3-2. へその緒（臍帯）の役割」と「3-4. 胎児と母親の血液は混じり合わない」は大幅に圧縮し、「3-3. 胎児の排泄行動等」は全く省略せざるを得なかった。その授業経過の詳細は、web 上の授業全記録を参照していただきたい。

## 3. 班討論とその後の発言

### 3-1. 授業記録抜粋

上述の授業全記録の中から「3-1. 胎児の生活を想像する」における班討論後の意見発表の部分を抜粋し、逐語記録（但し、授業者の発言のみ一部簡略化）を掲載する。

（『』は授業者の発言、「」は子どもの発言、「????」は聴取不能部分を表す）

[11:47]

『さあそろそろ 5 分経ったかな。じゃあね、一旦机を前向きに戻してくれるかな？（中略）それでは意見を発表したい人は手を挙げて下さい。』

画面上の約 17 人程度のうち、5 名が挙手。

[11:48]

T♂「呼吸の仕方が違う。」

『うん。それだけ？どのように？…わかった、じゃあまあとりあえず。呼吸の仕方ね…』

（板書）こきゅうのしかた

NA♂「羊水に浸かっているか浸かっていないかが。」

（板書）羊水につかっているかどうか

H♀「今は自分の口から、ご飯を、食べ物を食べているけど、赤ちゃんの時はおへそぐらいから栄養をとっていた。」

（板書）おへそからえいよう ↔ 口からえいよう

H♂「多分なんですけど、赤ちゃんの体の周りに、今とは違う皮というか膜が張られている。」

（板書）からだのまわりに膜

I♂「そんなに考えていない。」

『え？どういうこと？』

I♂「脳が…」

『あー、赤ちゃんは、な？なるほど。Iくんが考えてないんかと思ったら、違うんやな？（笑）赤ちゃんが、そんなに考えていない。』

（板書）そんなに考えていない

KM♂「その狭いところで水にぶかぶか浮かんでいるだけだから、ひま。」

『ひま？ひま、ということは、どういうこと？』

KM♂「なんもしてない。浮かんだるだけ。」

（板書）ひま（何もしていない）

子どもたち、KMくんの意見を巡ってザワザワする。

S♀「おかあさんとつなぐものがなくなっています。」

『（板書しながら）おかあさんとつなぐものが、なくなっている？』

S♀「つながっていたんだけど、切られてなくなった。」

（板書）←→ おかあさんとつなぐものがなくなっている

[11:53]

Y♀「赤ちゃんの時に、羊膜の中でへその緒でつながっている。」

『え？へそ…でつながっている？』

Yさん、うなずく。

Y♀「あの一、ホースみたいなものでつながっている。」

『…えっと、ごめんちょっともう1回言ってくれる？聞いている間に忘れてしまった。（笑）』

Y♀「赤ちゃんは羊膜と…羊膜についているホースでつながっている。」

『何とつながっているのかな？』

（「おへそからえいよう ←→ 口からえいよう」のそばに板書）

羊膜についているホースでつながっている

『（胎児の図を指さしながら）ここのことを言ってますね？羊膜のここんとこにくっついているホースで、何とつながっているかという、おかあさんの体とつながっている。』

NI♂「たぶん今の僕たちに比べて、その頃は毛とかが少ない。」

（板書）毛が少ない ←→<sup>14</sup>

N♀「人の言葉を…赤ちゃんは人の言葉をしゃべらないけど、今の私たちはなにになにか…しゃべってます。」

（板書）人のことばをしゃべらない ←→

KB♂「運動の仕方が違うと思います。」

『運動の仕方が違う、というのは、どういうことでしょう？』

KB♂「赤ちゃんの頃は、さっきのデータからも…3限目の時のやつからもわかるように、急に成長していて、だから赤ちゃんの時には、生まれる前は成長することだけに集中して運動していたけれど、今は他のこともやっている。」

『なるほど。赤ちゃんの時は成長することに集中して運動していた。だけど生まれてからは、成長することだけでなく、他のこともやっているということかな？』

（板書）成長することに集中して運動していた ←→ ほかのことも

F♂「おなかの中にいるときは、歯が生えてないけど、今は歯が生えてきて…」

（板書）歯がはえていない ←→ はえてきている

ここから2回目になる児童も指名。

H♂「赤ちゃんがまだ名前はついてないけど、今は名前がついてる。」

『なるほど、それはどこに書こうかな。<sup>15</sup>』

（板書）名前：ついている ←→ ついていない

NA♂「おなかの中ではまだちっちゃい方だけど、今は、生まれてからは、おっきい。今の僕たちはおっきくて、おなかの中の赤ちゃんはちっちゃい。」

（板書）小さい ←→ 大きい

I♂「今考えたんだけど、宿題がなくて、夏休みが多い。休みが多い。」

（板書）休みが多い

「いいな」「休みが多い」「宿題もない」などの声上がる<sup>16</sup>。

『宿題もないと。赤ちゃんに宿題は出ませんね。』

KM♂「おなかの中にいるので、暗そう。」

（板書）暗い

Hくんから3回目の発言を要求する声。

『まあ2回目の人からいこう。』

NI♂「たぶん今に比べて体が丈夫でないと思う。」

『どうしてそう思うかな？なんか理由ある？』

NI♂「理由は何となく。」

『でもからだが丈夫じゃないんじゃないかと。』

（板書）からだがじょうぶじゃない

Y♀「今と比べて赤ちゃんの頃は目が開いてなくて、今は目が開いている。」

（板書）目が開いていない ←→ いる

S♀「NIくんのでちょっと言えることがあって、体が丈夫でないっていうのは、私のプールの友達に赤ちゃんが生まれたんだけど、その時にそのおかあさんが言ったので、それで生まれた時は首の後ろが柔らかいっていうか、まだ????」

『は一、ちゃんと体のつくりができていなかったということかな？生まれた時に。そういうことも起こることがあると。ねえ、赤ちゃんの間はいろいろそういう、何と言えいいんだろう…病気というのか、そういうことが起こることもあると。丈夫じゃないと、いう話を聞きました、お友達の弟か妹か。』

[12:01]

T♂「呼吸の仕方????付け足しなんだけど、羊水に浸かっているわけだから、羊水って水だから、水がいっぱい入っているから、呼吸ができないと思う。だから呼吸の仕方がちょっと違う。<sup>17</sup>」

（板書）呼吸はできない

Hくんがまた「3回目いい？」と発言。NAくんも挙手しており、Hくんから「2回目？」と聞かれてうなずく。挙手は一部の児童だが、Hくんを中心に「もっと言いたい!」という空気がみなぎっている。

授業者は後の授業展開も考えていずれかの時点で発言を打ち切ろうと考えていたが、この時点で考えを変えた。

『(笑) まあみんな聞こう、じゃあ。』

KM♂「2 頭身。」

『2 頭身。2 頭身ってわかる？ちょっと説明しただけで、これ（＝胎児図）で。どういう意味か。』

KM♂「頭がでかいんで、体と頭を比べれば、頭が…頭の大きさの 2 倍の体。だから頭がでかい。」

『そうやね。頭の大きさの 2 倍くらいの体だということを 2 頭身っていうんですね。』

（板書）2 頭身

H♂「自分と、自分ってゆうか、自分と…中にいる時に…今はおかあさんのおなかに入なくて、この赤ちゃん…ちっちゃい、羊膜に入っている赤ちゃんは、ちっちゃいからおかあさんのおなかに入れる。\*」

『は一、なるほどね。大きさっていうことが、小さいっていうことは大事なんだと。おなかに入れる…ま、もともとおなかの中にいるんですけど、まあでも入ってられると。』

（板書）おなかに入れる

NA♂「今はもう袋とかに…そんな袋に入っていないけど、赤ちゃんの頃はまだこの袋に入っている。」

（板書）ふくろに入っている

T♂「あの写真で、毛が生えてないのもそうなんだけど、目と鼻と口と耳とかが、今は顔についてるのが、あまりはっきりしていない。」

（板書）目や鼻がはっきりしない

S♀「友達がいない」

S さんの斬新な発想に子どもたちからも笑いが起こる。

『さあ、みんな友達、いない…かな？』

「双子やったら」の声。

（板書）友だちがいない

『…ということもあるけど。まあ、双子で、2 人赤ちゃん入っても、生まれてからの友達とは違うよね、確かに。』

I♂「栄養だけをとっている。」

H くんから「先生ギャグみたいなことを言ったらだめですか？」の問い。

『ギャグはちょっとこの際休み時間にして。』

授業者は予期しない発言にとまどいながら、I くん発言を板書する場所を探している。

（板書）栄養だけをとっている

『栄養がえいよう、ってか？（笑い）』

『もうみんなすごい言ってくれるから、だんだん黒板の上が…わからなくなってきましたけども。』

S♂（板書事項に関連づけて発言しようとしているのか、黒板を見ながら体を左右に動かして、なかなか発言しない。）「?? ??」

『呼吸をしていない、ということね？（板書を指して）「呼吸はできない」と言ったけど、同じ意見です。』

[12:07]

まだ画面上で確認できるだけでも NA くん、I くん、H くん、3 人が挙手しているが…

『さあ、全員に全部聞きたいんだけど、もうちょっとやりたいこともあるから…』

挙手している 3 人は残念そう。

『あのね、後で感想文の用紙も実は用意しているから…』

H くん、「よっしゃ！」と喜ぶ。

授業者は、本来はこれらの意見をもとにさらに質問事項を班で出し合い、全体で話し合うことを予定していたけれども、時間がなくなったので省略して次に進むことを告げる。

### 3-2. 比較と分析

#### ①班討論が発言を刺激する効果を発揮した

発問「受精後 2 カ月の赤ちゃんの生活は、みんなの今の生活と比べるとどんなところが違っているか」に対する、班討論を経た後の児童の発言数は、上記の記録のように 28 回に及ぶ。しかし 2 回目、3 回目の発言も認めていたので、実人数を調べると、男子 9 名、女子 4 名、合計 13 名であった。35 名の学級であるので、この発問に対する発言者の割合は 3 分の 1 強であるが、28 回の発言が出て、まだ言いたい児童がいるところで締めくくったという状況は、活発な学習参加といっていようである。

2006 年度実践でのこの部分での発言者数は 9 名（総児童数 37 名）であった。この時は同一の発問の後すぐに挙手一指名一発言の流れに入り、まだまだ発言したい児童がいるところで打ち切る、というのではなく、言いたい発言が尽きたところで次に移ったのであった。

同じ発問に対して 2006 年度実践では 9 名の発言、2007 年度では 13 名、28 発言。この差は何によって生じたのであろうか？もちろん年度も違い、学級の個性も違うわけであるから、共通の授業シナリオで授業を行なったとしても随所で異なる反応が生じることは当たり前である。2 つの学級において、現在の自分たちと 2 ヶ月の胎児の生活を比較するという課題に対する関心の度合いがたまたま異なっていただけかもしれない。しかしそう結論づけてしまえば比較検討の意味がないので、ここでは学級の個性というファクターを敢えて横に置いて、この発問に基づく学習活動の進め方として、2006 年度は直ちに発言を求め、2007 年度は 5 分間の班討論の後に発言を求めたという違いが何らかの影響を与えたのかどうかを考察してみたい。

班討論の導入の際の留意点は 2 点あった。

第 1 は、2006 年度実践で当該部分での発言が学級の約 4 分の 1 にとどまったことをふまえ、まずは班で活動することで、ほとんどの子どもが発言する機会を持てることを期待したのである。但し 5 分間の班討論の間、授

業者は若干は教室を動いたが、各班の討論の内容を掌握したり、ましてや討論に加わることはしていない。日頃から児童と交流があり、指導も継続して行なっている学級担任と異なり、あくまで1回限りの授業者であるということで、班活動の時間に個々の子どもを自ら把握するということは最初から断念していた。

第2は、班討論の内容をその後全体で集約する、という形態を意識的に取らなかったことである。もしこの形態を取るなら、討論中に班長なり他の誰かが班の討論内容の発表者となることを決め、班討論終了後に各班1名から全体への報告を聞くことになる。この方法では班の数と同じ人数の発表者しか確保できない。全般の発表が終わった後に補足発言を促すことはできるが、全体として代表が発言しているというムードになる。そうではなくて、班での議論に触発されて、全体討論でも誰でも発言できるようにしたかった。そして、班の数は9前後だと思われ、発言数は28回であったので、班討論を契機に全体での発言も活性化されるという効果は発揮できたと思われる。

## ②胎児の生活を想像する発言内容の分析

受精後2ヶ月の胎児の生活を、4年生の自分の生活との比較において想像した28回の発言の内容を整理してみる。授業の中では、胎児の状態を左に、現在の4年生の状態を右に書くという区別をしたくらいで、内容面では最初は整理して板書しようとしていたが、あまりの発言の多さに、多少の関連づけの努力はしたものの結局ほとんどただ黒板を埋めていくだけに近くなり、児童の発言をカテゴライズしてフィードバックすることは全くなかった。

しかしあらためて発言内容を分析してみると、大きく以下の2カテゴリーに分かれる。

### A. 胎児の視点に立とうとしたもの

- ①H♂：からだのまわりに膜←→
- ②NA♂：まだ袋に入っている←→もう袋に入っていない
- ③Y♀：羊膜についているホースでつながっている←→
- ④S♀：←→おかあさんとつながものがなくなっている。
- ⑤NA♂：羊水につかっているかどうか
- ⑥-1 T♂：呼吸の仕方
- ⑥-2 T♂：羊水に浸かっているから呼吸ができない←→
- ⑦S♂：呼吸をしていない←→
- ⑧H♀：おへそから栄養←→口から食べ物
- ⑨I♂：栄養だけをとっている←→
- ⑩KM♂：おなかの中にいるので暗そう←→
- ⑪KM♂：2頭身←→
- ⑫NI♂：毛が少ない←→
- ⑬T♂：目と鼻と口と耳があまりはっきりしていない←→
- ⑭Y♀：目が開いてない←→目が開いている
- ⑮F♂：歯が生えていない←→歯が生えてきている

⑯NI♂：たぶん今に比べて体が丈夫でない←→

⑰S♀：生まれた時は首の後ろが柔らかい←→

(Tくんの発言は、約13分の間隔を置いて2回あったが、2回目は1回目の説明不足を補おうとしたものであったので、一連の発言と考え、⑥-1・⑥-2とした。)

### B. 現在の自分の視点を足場に推理したもの

⑱NA♂：おなかの中では小さい←→大きい

⑲H♂：小さいからおかあさんのおなかに入れる←→おかあさんのおなかに入れない

●H♂：まだ名前はついてない←→名前がついてる

●KM♂：ひま（何もしていない）←→

●I♂：宿題がなくて休みが多い←→

●I♂：そんなに考えていない←→

●N♀：人の言葉をしゃべらない←→しゃべる

●S♀：友達がいない←→

●KB♂：成長することだけに集中して運動していた  
←→他のこともやっている

惜しむらくは、授業者が予想を大きく超える発言要求に対して喜びつつも動揺してしまったために、個々の発言の内容をさらに深めたり他の発言と関連づけて討論に持ち込んだりできていないことである。そのため個々の発言の趣旨を深くとらえることができない。だが上記のカテゴライズから一つ明確になったことがある。それは、経験ある教師であれば常識的に知っていることであろうが、授業を計画する授業者の発想と、白紙状態から（深く検討すれば白紙ではないだろうが、少なくともその日の授業で「何が出るか」については白紙）授業に参加してくる子どもたちとでは、共通に確認したはずの発問の内容についても、全く異なる解釈をしている場合があるということである。

授業者は確かに、4年生児童の等身大に近い胎児図を用意し、「みんなの今の生活と比べると」という条件設定をしている。しかし4年生自身の生活というのは、授業者にとってはあくまでも考える出発点、手がかりに過ぎず、推測してほしいのは胎児の生活であった。そしてそれは、単なる想像で終わらせるのではなく、そこから疑問点を提起させて、それとかみ合う形で授業者が胎児の生活について説明していく、という指導のライン上に位置づいていた。

しかし子ども、特にBカテゴリーの発言をした子どもは、あくまで今の自分たちの生活に足場を置いていた。子どもなりに忙しい、いろいろなことに追われる現在の生活を思う時、「赤ちゃんはのんびりしてるな、ひまだな。宿題もないし、考えなくていいし、しゃべらないし…」と、いま自分たちはしなければならないことをしなくてよい胎児、という発想で考えた。つまりは社会生活の視点で胎児について考えようとしたわけである。

授業者は学習方法面では多くの発言が出ることを期待

していたけれども、内容面ではあくまでもその後の説明で臍帯を媒介にした胎児と母体のつながりについて、また深いつながりがありながらも母体と胎児の血液が決して混じり合わないことの不思議さについて説明するための布石として、子どもたちの予想や（時間がなく省略したが）質問を要求していた。これに対して子どもたちは授業者の想定を大きく超えた量と質の発言で応えた。

本当に子どもたちの発言を尊重し、内容上も大切にするという授業者の姿勢を貫くためには、出された発言の内容を例えば上記のようなカテゴリーに整理しながら、その一つ一つを子どもたちとともに検証していくことが必要である。しかしそれには、臍帯や胎盤の役割に限定された授業者の事前の教材研究では決定的に不足である。この数倍の教材研究を行なった上で、子どもたちの発言とかみ合う形で未知の情報を提供していかなければならない。

ちなみに、2006 年度実践の同一箇所での 9 人の子どもたちの発言内容は、以下のようなものであった。

- ・ $\longleftrightarrow$ 羊膜の中に生活していない
- ・ $\longleftrightarrow$ 羊水の中に浮かんでいない
- ・へその緒から栄養をもらっている $\longleftrightarrow$ 自分で…
- ・歩いたり動いたりしない $\longleftrightarrow$ 自分で歩いたり動いたりする
- ・（上記意見に対して）歩いたりはしないけど動いたりする
- ・聞いたりできるが見るとかはできない
- ・（上記の意見に対して）見ることができる
- ・食事をしていない $\longleftrightarrow$ 食事をしている
- ・寝る時に今日あったことを考えて寝る $\longleftrightarrow$ 想像の夢を見て寝る

この時も冒頭の 2 発言は 4 年生の自分の状況に足場を置くものであったが、第 3 の発言以降胎児に発言の焦点が移ってきている。冒頭の 2 発言も思考の方向の問題だけであって、あくまで関心は胎児中心である。これに対して 2007 年度実践ではなぜ自分たちの現在の生活に胎児を引きつけて、「こういうことはしていないだろう。していないからいいなあ。」という趣旨の発言が出てきたのだろうか？単なる学習者のキャラクターの違いだろうか？授業のそれまでの過程で、胎児の生活を想像する手がかりになりうるものとして与えた情報は、2 実践ともほぼ同じなのだが。

#### 4. おわりに

紙数がなく、言葉足らずにならざるを得ないのだが、上記の授業分析で検討してきたことは、実は「教科内容の系統性と生活経験に根ざした子どもの思考の絡み合い」という、50 年以上も議論され続けている教育方法学、教授学、教科教育学の古典的な検討課題につながってい

る。2007 年度附属小学校 4 年生の子どもたちの一部ではあるが、胎児の胎内での生活を学習する際に、4 年生の自分の生活の現状を色濃く投影させて思考しようとする者がいた。これはもちろん、胎児の生活自体についての情報がきわめて少ないため、生活経験を動員して推理せざるを得なかったということでもあるが、教材教具や学習過程の構成において児童の生活との親近性に配慮したことによって、授業計画者が想定し得なかった児童の生活の文脈を授業に中に引きずり込んだということをも意味する。

この段階に到ってもう一度授業計画者は、教えたい教育内容の組み立てと児童の生活経験に基づく思考をどう絡み合わせるか、どこまで絡み合わせようとするかを問われる。

幸いにも同一の学校・同一の学年で 2 年度にわたって基本的に共通する内容で授業を行なう経験をさせていただくことで、全体の実践の中では微細な部分についてはあるが、教育方法学上の重要な基本課題に改めて迫る示唆を得ることができた。実験授業の実施を支えて下さった附属小学校、教育学部の関係者、そして何よりも重要な実践の事実を生み出してくれた附属小学校 2007 年度 4 年 C 組の子どもたちに感謝します。

#### 註

\*1 拙稿「小学校性教育における『生命誕生過程』の授業実践の自己分析」 三重大学教育学部研究紀要第 59 巻（教育科学） 2008 年 P.237-248

\*2 同上、P.247

\*3 [http://www.cc.mie-u.ac.jp/~tsatou/20071211\\_fushou4C.pdf](http://www.cc.mie-u.ac.jp/~tsatou/20071211_fushou4C.pdf)

\*4 授業者は $\longleftrightarrow$ という記号を使って、左側を胎児の状態、右側を現在の子どもの状態と区別して板書しているつもりだが、そのことを子どもたちにきちんと説明せずに記号と使っているのも、子どもたちがどの程度理解していたか不明である。

\*5 これは単に板書の場所に迷っているのではなく、命名の有無という社会的な特徴の違いが出てきたことへのとまどいである。授業者はあくまでも生物的・身体的な特徴の比較を期待しているが、児童の中にはもっと幅広く考えている子もいたのである。

\*6 ここで子どもたちの思考はやや違う方向に向いている。授業者が KM くんの発言（ひま）にも結びつけたことを意識したかどうかはわからないが、現実の自分たちの生活に比べてのんびりゆったりしたものと胎児の生活をイメージしたようであるでそれにあこがれるかのような発言もあった。現実への子どもたちの思いの一端を垣間見ることができる。しかし 3 限であ

つかったような2000倍の成長という、誕生後とは比較にならないような体の拡大・膨張の途上にある胎児を、本当に「のんびり・ゆったり」のイメージでとらえてしまってよいのかという課題も残る。

\*7 T君は、この発問に対する第1番目の発言者だった。そこで「呼吸の仕方が違う」と述べたので授業者がさらなる説明を求めたが、説明はなかった。ここでの2回目の発言の最後に「だから呼吸の仕方が違う」とやや強調するように言ったのは、1回目に説明不足と見なされたことへのリベンジであると推測できる。しかし授業者は、この時点でそのことに気づいてはいなかった。

\*8 Hくんの「ちっちゃいからおなかに入れる」という発言に対して、授業者は思わず「もともとのおなかの

中にいるんですけど」とコメントしてしまっているが、Hくんは何を言いたかったのだろうか。3限に胎児の驚異的成長についても学習している。逆にたどれば、成長途上の胎児がとても小さいというのは学習した事実そのままとも思える。しかしHくんの発想はそうではなかった。とってもちっちゃいからこそおかあさんのおなかに入れるという気づきは、一人の人間の体内にもう一つの生命が活着しているということの不思議さへの着目だったのではないか。うんとうんと小さいからこそ入ってられるんだ、僕たちみたいに大きいと無理→赤ちゃんがおなかに入っている仕組みってすごい、という気づきだったのではないか。あくまで推測であるが。